

短歌 (十三)

下田 明美

中天にスーパームーン輝けり

海辺の町は凍てついている

年ごとにレモンの果実は増えてゆく

百まで生きれば百個のレモン

早春の野にも山にも蜜柑みかんなる

収穫できない、老いてしまつて

生きるのはかなりの労働、一日の

終わりのひととき晩酌となる

如月に背伸びして咲く水仙は

守られているたくさんの葉に

黄緑のクリスマスローズ大輪の

花を咲かせた如月なのに

梅の花かす微かに揺れてる蜜吸いに

偵察隊の初メジロ来る

入院の夫見舞いに階段を

登れば前にナースステーション

リュウマチの痛みに負けた声にした

中伊豆にある温泉病院

一人でも両手を合わせてハイタッチ

自身をハグして、朝の体操

小春日の陽ひかりを浴びて温ぬくもれば

猫かも知れず人かも知れず

満開の河津桜の並木道

海辺の町が華やいでいる

スズメ来て啄ばんでいる私の

ほうれん草は芽が出たばかり

繭が糸、繰り出すようにふんわりと

優しい思いがあるかも知れない

春なのかモヤモヤとして目が覚めた

もしそうならば夢は正夢

車検して保安基準の標章を

貼らずに納車して来た業者

